

【活動名】 「積極的な生徒指導の推進」～「いじめ等問題行動の未然防止のための生徒指導の視点を意識した授業づくり」を通して～

解決すべき課題： 茨城県立高等学校等における生徒指導上の問題行動等より以下の課題が挙げられた（平成 25 年当時頃）。

- ・暴力行為・・・暴力行為の傾向の変化。ライン等のアプリ内でトラブルが起き、実際に会った時に第三者が絡むことなどにより、暴力行為が重篤化した。
- ・いじめ・・・いじめを背景とした自殺に起因していじめ防止対策推進法が公布され、県や学校ではいじめ防止基本方針を策定することなどが求められた。
- ・中途退学・・・不本意入学や友人関係及び学業等の複雑な条件が重なり、自信を喪失するなどして学校を途中で退学する生徒が増加傾向であった。
- ・不登校・・・学業や友人関係及び家庭の問題等で悩み、カウンセリング等でもなかなか改善せず、学校に足が向かなくなるケースが増加傾向であった。

目的や背景： 生徒指導の概念として、問題行動等の未然防止、早期発見、早期対応が挙げられる。平成 25 年当時、本県の生徒指導は、問題の早期発見と早期対応に重点が置かれ、各学校の生徒指導部会議も問題が起こってから特別指導の在り方の検討が主であった。このような、いわゆる後追い指導では問題行動等を起こす生徒は減少せず、安全・安心を保障すべき健全育成の場である学校だけでは解決困難な事案も起こった。そこで、平成 25 年 6 月に「児童生徒の健全育成に関する警察との連絡制度」を策定し、学校から通報するような大きな事案でなく、小さなことでも相談できるようにした。しかし、全ての問題を解決することは困難であり、高等学校等を中途退学した後引きこもったり、少年院等で矯正教育を受けたりする場合もあった。

そこで、本県における生徒指導の在り方を、「積極的な生徒指導」、すなわち問題行動等の未然防止に重点を置くことによって、問題行動等に向かわないような生徒の資質・能力の育成に取り組むこととした。

活動内容： 平成 26 年度から全県を挙げて積極的な生徒指導を推進するため、全県立高等学校等で「いじめ等問題行動の未然防止のための生徒指導の視点を意識した授業づくり」を開始し、問題行動等の未然防止を図っている。基本理念は「これまで通り、日頃からルールやマナーを遵守する規範意識を醸成し、平行して問題行動の未然防止の視点で「自己指導能力」を高めていくことによって、いじめ等の問題行動に向かわない生徒を育成することが可能になる（H24 新井肇）」という教えによる。その理念を基に、学校教育の基盤である授業の中で自己指導能力を高める授業におけるいじめ等問題行動の未然防止方法（右図）を提案し、全県立高等学校等の授業で実践することにより、問題行動の未然防止を現在も継続して行っている。

「いじめ等問題行動の未然防止のための生徒指導の視点を意識した授業づくり」とは、各学校における普段の授業で問題行動の未然防止の視点を意識し、生徒の自己指導能力等を高めること。問題行動の未然防止の視点とは、「自己指導能力」を高めることを最終目的とする。「自己指導能力」の定義は、「そのとき、その場で、どのような行動が適切か、自分で考え、決めて実行する能力」。

その「自己指導能力」を高めるには、生徒の自己存在感（自分はかけがいのない存在であることが見いだせたり、自分の存在を価値あるものと受け止められたりする感覚）や自己有用感（自分は「認められている」、「役に立っている」、「大切にされている」といった思い）を養い、かつ共感的理解（他者についてその人そのものを理解すること）の能力を培うこと、また、授業において言語活動等を定期的に取り入れ、生徒が自己決定をし、発表する場面を設定することである。

授業の言語活動等の話合いで、話を聞いてもらうことで自己存在感を養い、話を聞くことで共感的理解の能力を培う。また、協働して思考・判断したことを表現する発表活動等を通して、適切な判断力や自己有用感を高める。この趣旨を、全校生徒指導主事等を集め説明し、各学校で伝達研修を実施。その授業を実践した結果を各校一部報告願ひ、資料集として冊子にまとめ、全校に配付している。

活動の成果： 生徒に自己存在感や共感的理解の能力が身に付いたことによって自己指導能力が向上したため、以下のような成果が得られた。

- ・暴力行為・・・対教師暴力・生徒間暴力の発生件数が減少するとともに、被害者が大きな負傷をしたり、加害者が逮捕されたりする事案が減少した。
- ・いじめ・・・認知件数が増えたが、解消率は維持できた。また、重大事態に発展する事案はなかった。認知件数の増加は小さなものでも見逃さなかった結果であり、解消率は定義が変更されたが維持することができた。特に、重大事態に至っていないのは自己指導能力の向上と考えられる。
- ・中途退学・・・この取組をする以前との比較では、退学者数が 308 人減であり、自己有用感が高まり自己指導能力が向上した成果と捉えている。
- ・不登校・・・この取組をする以前との比較では、不登校者数が 110 人減で、1000 人当たりの出現率は全国で最も少ない県となった。この取組により生徒の自己存在感等が培われたためと考えられる。

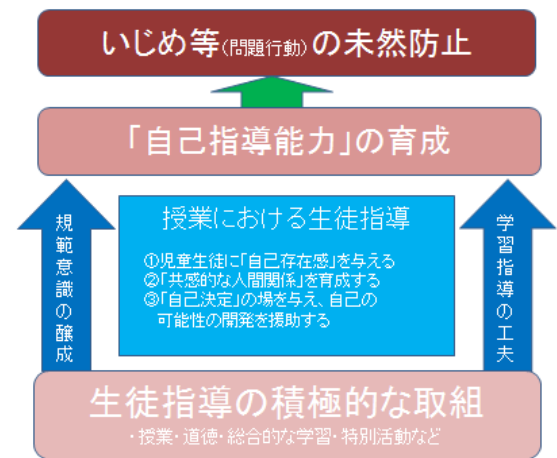
アピールポイント（アイデア）： 以下のように趣旨の伝達を行うことによって、生徒の自己指導能力を高め、問題行動等の未然防止を図っている。

趣旨及び期待される効果の周知

- ・全県立高校等（98 校）の生徒指導主事を招集し、本県の生徒指導の現状と課題、改善点と「いじめ等問題行動の未然防止のための生徒指導の視点を意識した授業づくり」について説明（平成 26 年度～平成 29 年度）
- ・全県立高校等の校長、副校長・教頭の集まる会議における講師として、本県の生徒指導の現状と課題及び改善点、そして「いじめ等問題行動の未然防止のための生徒指導の視点を意識した授業づくり」について説明（平成 26 年度～平成 27 年度）
- ・「茨城県いじめ防止基本方針」（平成 26 年 3 月）に、「いじめ等問題行動の未然防止のための生徒指導の視点を意識した授業づくり」の要素である自己指導能力についての記載をして、県全体で取り組むよう求めた。各学校の基本方針では、自己指導能力を育み、その評価をするよう求めた。
- ・本県の「中堅教員研修」（平成 29 年 11 月等）において、「主体的・対話的で深い学び」（いわゆるアクティブ・ラーニング）の視点的授業における生徒指導の視点を意識した授業について解説した。その実践報告書をもとにマイクロ・ティーチングを行うなどして、より質の高い生徒の学びの追求をしている。

概念及び内容の伝達

- ・平成 26 年にこの取組を開始した当初は、様々な会議で趣旨説明をしてもなかなか理解を得られなかった。しかし、各学校で実践が進むにつれて、生徒の自己指導能力が向上し、生徒の良い方向への変容が見られたことによって、徐々にその重要性を実感してもらえた。各年度末に全県立学校の報告書を冊子にまとめた「いじめ等問題行動の未然防止に係る授業実践報告書資料集」を作成し、本県全高等学校等に配布した。当初、生徒指導の担当者に限られた実践であった学校でも、2 年目以降は他校の取組を参考に、より多くの教科・科目等に広がり、その趣旨を認識した取組が浸透してきている。現在も、より質の高い活動を実現し、より多くの生徒の自己指導能力の向上を実現するため、研修等の実施に取り組んでいる。



資料

授業において目指す生徒の姿

「集団において自分の役割を見つけ、目標を持って取り組むことができる」

「他者の価値観を受容し、視野を広げて自分の考えを深めていく」

授業者 茨城県立下妻第二高等学校教諭 北條 奈緒美

【授業の中で目指す生徒の具体的な姿の設定理由とねらい】

◇生徒の実態：担当するクラスの生徒は授業に前向きで、活動や課題に対して積極的に取り組んでいる。一方、他者と協力して課題を達成させる際に、スムーズに進まない場面が多く見られた。要因の一つとして、考えをまとめる能力・伝える能力が弱い点が挙げられる。また、コミュニケーション能力や人間関係構築への積極性の向上も求められる。

◇ねらい：それらの能力を高めるためには、他者の意見を受容したり理解したりして、自分の考えに反映させていく機会を持たせることが重要であると考えた。他者の意見に傾聴する態度、自分の考えを発信する姿勢、複数の意見・他者との価値観の相違に対しても尊重し、建設的に意見をまとめようとする力を身に付けさせていくためには、受動的な活動と能動的な活動の効果的な組み合わせが必要となる。一過性の実践で結果を求めるのではなく、取り組みを継続し、進路決定や自己実現につながるような自己指導能力を伸ばすきっかけの一つにしていきたい。

【生徒指導の視点を重視した授業づくりの実践事例】

- 単元：Communication English I Lesson2～Lesson7（5月～12月）
- 実施クラス：1年2組，4組，7組（各男子21名・女子19名）

他者と協力して目標を達成したり、他者と話し合って意見をまとめたりする経験を通し、自分の価値観や考えを言語化する能力を養っていく。

継続実践し、自分の可能性を自分で広げていく力を育ませ、自己指導能力の向上を図る。

自己存在感

導入

【Speaking1】

・既習の語や文法を用いて、課題のトピックに添って自分の意見をまとめ、1分間でペアの相手に伝える。

e.g.“What will you do to make your dream come true?”
◇聞き手の生徒は、傾聴の姿勢を大切にする。相手がどのような考えがあるのかを理解するとともに、語数をカウントする。
(→記録シートに毎回記入)



共感的理解

【New words, Listening】

・単元の新出単語，リスニング活動を通しての英問英答
・本文の内容を理解していく姿勢を作っていく。

内容理解定着

展開

【Reading1】

・本文の英問英答



【Reading2】○Speed Reading Race

・ペアリーディング。単元の特性やねらいに応じて形式を変更する。発音の正確性・流暢さに注意しながら他のペアと競争。序列をつける。

ペアで協力しないとゴールができない。苦手意識や不得意をペアでカバーできるワークシートを用意する。毎回必ず実施し、次回への学習意欲向上へつなげる。

【Reading3】

・前活動のペアで行った内容理解の確認をもとに、再度、本文内容を整理。本文の英問英答。

【Writing】○要約作成1
・空欄補充，単語選択等を通して、要約を作成し、内容理解の定着を図る。

自己指導能力

終末

【Writing】○英問英答・タイトルの作成



教科書等に記載していないオリジナルの質問を考え、発表する。また、本文の核となる内容やキーセンテンスを見つけ出し、タイトルを決める。

自己存在感

共感的理解

【Speaking2】○Retelling

キーワードを活用し、本文の再話を試みる。ペアの聞き手役は、相手がきちんと本文を理解できているかを確認。状況に応じて相手にヒントを提示する。

自己決定

振り返り

【Evaluation】

○自己評価
・理解度を自己評価（4段階評価）

自己有用感

【Reading4】○音読リレー，要約作成2

・単元の本文を1人1文ずつ音読し、グループ対抗で速さと発音の正確さを競う。協力し合う。
・与えられた文を並び替え、要約作成をグループで行う。

男:1	女:2
女:4	男:3

【Presentation】

○Retelling&意見発表
・単元の特性によって、クラスでの発表または個別でパフォーマンステストを実施。

【成果】

入学後のアンケート調査の回答で「自分の考えや意見を整理することができる」が85%、「他者の意見に共感できる」が90%とあり、生徒の自己指導能力の基礎がすでに備わっていることが分かった。次のステップは他者との関わりを通して自分の価値観を豊かにすることだと考え、授業づくりを意識した。生徒の視野は少しずつ広がり、柔軟に考えたり発言したりする様子も見られる。より良い自己実現を促す上でも、生徒が多角的に情報を取り入れ、他者との関わりの中で自分の考えを深めていくよう、授業展開や仕掛けの設定を十分に行う必要性を感じている。

「さまざまな場面で目標を持って取り組むことができる」/「他者の意見を通して視野を広げ、自分の考えを深めることができる」の問いに「あてはまる」と答えた生徒の割合

実践前（4月）	70 % / 52 %
実践後（12月）	85 % ↑ / 75 % ↑